

師への感謝

——藤井啓行先生を偲んで——

芝田豊彦

藤井先生のご病状が樂觀できないということはお聞きしていましたが、突然の訃報に呆然としてしまい、死という厳粛な事実を俄に了解することができませんでした。死というものが、何時も理不尽な形でしか私の側を通り過ぎて行かなかったように、先生の死も私には容易に合理的な解釈を許すものではありませんでした。特に学部時代ドイツ文学とは全く無縁な学部に籍を置いていた私にとっては、博士課程の5年間を通じ指導教官をして頂いた藤井先生は文字通り掛け替えのない恩師でしたので、一層そのような思いが強いのかも知れません。今、先生の死から半年ほど経ちましたが、やはり上の理不尽さは解消されず、先生を思い出すことに深い悲しみが伴うことにも変わりがありません。しかしその悲しみは変容し、感謝という癒しを私に齎してくれるようになりました。そのような感謝の念をもって、思い付くままに先生の思い出を幾つか述べてみたいと思います。

先生の闘病生活のほぼ真ん中に当たる1993年3月の卒業式の日に、先生は巣立っていく独文科の学生を前に祝いの言葉を述べられました。その中で先生がご自身の闘病生活に触れて次のように言われたことが、今でも鮮やかに思い出されます。「今迄は死を観念的に考えていたが、今は非常に身近に感じている。かつて、若い時は生が前提で死があったが、今は死が前提で生があり、毎日の生を新鮮に感じ、日々感謝して受け取っている。」およそそのような内容でありました。先生は「死の問題」にも造詣が深いとお聞きしていましたが、その先生がご自身の闘病を通して死に対する今までの観念的な対処の仕方を反省されておられるようにも窺えました。私自身も人生に対する先生の真摯な態度に改めて心を動かされると同時に、深く反省させられたのでした。というのも、私の文学研究を初めから衝き動かしてきたのも同じ死の問題であり、生死を根底に於て究めることが目

標だったにもかかわらず、死を余りに観念的に捉えてきたことに気付かされたからなのです。新たな境地から「死の問題」が深められ、その成果を先生からお聞きできることを、その時は不覚にも信じて疑いませんでした。しかしご存じの通りご病気が再発され、遂に先生から教を乞う機会を永遠に失ってしまいました。

ところで何時の時代も悪人が栄え、善人が衰えるような印象を人は持つものですが、それに対する道元の態度は「深信因果」で一貫していました。正法眼蔵『三時業』では、「人ありて、この生にあるひは善にもあれ、あるひは悪にもあれ」為した行いは、たとえ今生でなくても、来世、来々世で必ず報いを受けるという「三時業」の思想が強調されます。聖書では類似の思想が、「我等はみな必ずキリストの審判の座の前にあらはれ、善にもあれ、悪にもあれ、各人その身になしたる事に随ひて報いを受くべければなり」（コリント後書5章10節）と表現されています。このような思想は、結局は人生を責任を持って生きることの根拠のように私には思われます。先生が因果の思想を信奉されていたかどうかは知りませんが、実はこのような責任ある人生の態度、真摯な人生の態度こそが、私が先生の生き方から学んだ最大の教えなのでした。

最後に先生のやさしさについて述べたいと思います。私の場合、先生のお顔を思い出す時は、いつもあのやさしく微笑まれている先生のお姿です。このやさしさは、授業中一切雑談をなさらなかったあのきびしさと矛盾するのではなく、むしろ両者が不二不二の関係にあるところに先生のお人柄のユニークさがあったように思います。ただやさしさと言っても、上に諂うようなものではなく、縁の下の力持ちのような仕事をしている人への思いやり、真剣に生きようとする者に対する慈しみというようなものでした。例えば、日本独文学会が阪大で行われ、院生やODが手伝いに駆り出された時も、それぞれの部署を回って労をねぎらって下さったのも先生でした。そのような思い出は枚挙に遑がありませんが、今では私の貴重な財産になっています。ともかくこのような思い出を持つことのできた先生との出会いに、心より感謝しております。そして先生から学んだ有形無形の教を活かしていくことによって、少しでも先生の学恩に応えることができれば、と思う次第です。